



**\*\* 2月生まれの「偉人・著名人の名言」 \*\***

<岡本太郎>

(1911年2月26日~1996年1月7日 (84歳))

1911年に神奈川県橋本郡高津村(現:川崎市高津区)に、漫画家である父の岡本一平と歌人で作家である母のかの子との間に長男として生まれる。幼少の頃から絵を描くことが好きだったが、「何のために描くのか」という疑問にさいなまれながらも東京美術学校へ進学する。既存概念にとらわれず、自由や権利を阻害するものや権威で押さえつけようとするものには、生涯反抗した。芸術を志す人々だけではなく、広く一般の人々にも共感を与えた。父のロンドン軍縮会議取材に伴い、東京美術学校を休学し、1930年1月にパリに渡仏する。以後約10年間をパリで過ごすこととなる。1932年、芸術への迷いが続いていたある日、たまたま立ち寄った画廊でパブロ・ピカソの作品『水差しと果物鉢』を見て、強い衝撃を受け、「ピカソを超える」ことを目標に絵画制作に打ち込むようになる。1940年、ドイツのパリ侵攻をきっかけに帰国する。1942年、帝国陸軍の兵士として召集され、中国戦線へ出征する。1946年、太平洋戦争終結後に復員し、再び制作に励む。1947年、新聞に「絵画の石器時代は終わった。新しい芸術は岡本太郎から始まる」という宣言を発表し、当時の日本美術界に挑戦状を叩きつけた。1951年、東京国立博物館で縄文土器を見て衝撃を受ける。1952年、美術雑誌に『四次元との対話 縄文土器論』を発表し、これをきっかけに日本美術史は縄文時代から語られるようになったといわれている。1970年に大阪で万国博覧会が開催されることになり、テーマ展示のプロデューサーに就任する。「とにかくべらぼうなものを作ってやる」とひたすら構想を練り、高さ70mの『太陽の塔』を制作した。1970年代以降には、日本テレビバラエティ番組「鶴太郎のテレもんじゃ」にレギュラー出演する。冒頭でリヒャルト・シュトラウス『ツァラストゥラはかく語りき』を鳴り響かせ、ドライアイスの煙が立ちこめる中から異形の風貌で、「芸術は爆発だ!」「何だこれは!」などと叫びながら現れる演出が人気を博し、これらのフレーズは流行語にもなった。老いを重ねても創作意欲は衰えず、個展など精力的な活動を続けていたが、80歳のときに所蔵するほとんどの作品を川崎市に寄贈した。1996年1月7日、以前から患っていたパーキンソン病による急性呼吸不全により死去した。生前「死は祭りだ」と語り、葬式が大嫌いだっただことに配慮し、葬儀は行われず、翌月にお別れ会として「岡本太郎と語る広場」が開かれた。

いいかい、  
怖かったら怖いほど、  
逆にそこに飛び込むんだ。  
僕は流れるって感じが好きなんだ。  
固定したものは全然つまらない。  
人生だってそうだろう?  
いつも流動的で、  
何が起るかわからない。  
だから面白いんだ。



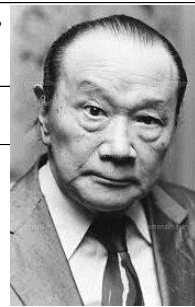
人間は精神が拡がる時と、  
とじこもるときが必ずある。  
強烈にとじこもりがちな人ほど  
逆にひろがる時がある。  
チームを作ったり、コンピで何かやるときは、  
遠慮したり、内にこもらず、  
面白くぶつかりあうことが大事だね。  
ぶつかりあうことが面白いと思って  
お互いをぶつけあう。  
そうすれば、逆に生きてくる。



友達に好かれようなどと思わず、  
友達から孤立してもいいと腹をきめて、  
自分を貫いていけば、  
本当の意味でみんなに喜ばれる人間になれる。  
むしろ「成功は失敗のもと」と逆に言いたい。  
その方が、この人生の面白さを  
正確に言いあてている。



私は、人生の岐路に立った時、  
いつも困難なほうの道を選んできた。  
この瞬間、瞬間に、  
若さとか、年よりとか、  
力がないとか、才能とか、金とか、  
あらゆる条件を超えて、  
その持てるぎりぎりいっぱい容量で挑み、  
生きるということだ。



壁は自分自身だ。  
挑戦した不成功者には、  
再挑戦者としての新しい輝きが約束されるだろうが、  
挑戦を避けたままオリエてしまったやつには  
新しい人生などはない。



危険だ、という道は必ず、  
自分の行きたい道なのだ。  
ほくは口が裂けても、  
アキラメロなどとは言わない。

信念のためには、  
たとえ敗れると分かっているても、  
おれを貫くそういう精神の高貴さがなくて、  
何が人間と僕は言いたいんだ。

なんでもいいから、  
まずやってみる。  
それだけなんだよ。  
自分の中にどうしても  
譲れないものがある。  
それを守ろうとするから弱くなる。  
そんなもの、ぶち壊してしまえ!

でたらめをやってごらん。  
口先では簡単にでたらめなら、  
と言うけれども、  
いざでたらめをやろうとすると、  
それができない。

素朴に、無邪気に、  
幼児のような眼をみはらなければ、  
世界はふくらまない。

逃げない、  
はればれと立ち向かう、  
それがほくのモットーだ。

※1970年に大阪で開催された日本万国博覧会のシンボル『太陽の塔』の制作者である岡本太郎は正に時代の寵児であった。当時、多くのテレビ番組やCMなどにも登場し、「芸術は爆発だ!」とか、「何だこれは!」とか、目を大きく見開き両手を大きく広げながら叫ぶ姿は今でも強烈な印象を併って記憶に残っている。実は、日本人では数少ない世界的に通用する芸術家である。そのような天才である岡本太郎の言葉にはシンプルだがぶれない力強さがある。

**\*\* 数にまつわる話し⑪<素数⑥> \*\***

数にまつわる話し第11弾は、前回に引き続き「素数」の第6回です。「オイラーの素数生成多項式」の話しです。

レオンハルト・オイラーは、スイス生まれの18世紀の数学者・天体物理学者であり、素数にとりつかれ、10万を超える素数表を作ったことでも知られています。この素数の研究の中で「オイラーの素数生成多項式」 $f(n) = n^2 + n + p$ を発見しています。特に、 $p = 2, 3, 5, 11, 17, 41$ においては、 $f(n) = n^2 + n + p$ が  $0 \leq n \leq p - 2$  で素数を取り、このpの値を「オイラーの幸運数」と呼んでいます。

例えば、 $p = 11$  の場合、 $f(n) = n^2 + n + 11$  は  $0 \leq n \leq 9$  において、 $f(n)$  に  $n = 0$  から  $n = 9$  を順次代入した値は 11, 13, 17, 23, 31, 41, 53, 67, 83, 101 と全てが素数となります。

また、 $p = 41$  の場合、 $f(n) = n^2 + n + 41$  は  $0 \leq n \leq 39$  において、 $f(n)$  に  $n = 0$  から  $n = 39$  を順次代入した値は、41, 43, 47, 53, 61, 71, 83, 97, 113, 131, 151, 173, 197, 223, 251, 281, 313, 347, 383, 421, 461, 503, 547, 593, 641, 691, 743, 797, 853, 911, 971, 1033, 1097, 1163, 1231, 1301, 1373, 1447, 1523, 1601, 1687, 1777, 1871, 1969, 2071, 2177, 2287, 2401, 2519, 2639, 2761, 2887, 3017, 3151, 3291, 3437, 3587, 3743, 3901, 4061, 4223, 4391, 4561, 4733, 4907, 5083, 5261, 5441, 5623, 5807, 5991, 6177, 6361, 6547, 6733, 6921, 7111, 7301, 7491, 7681, 7871, 8061, 8251, 8441, 8631, 8821, 9011, 9201, 9391, 9581, 9771 と全てが素数となります。

興味のある生徒諸君は、 $p = 11, 41$ 以外の「オイラーの幸運数」 $p = 2, 3, 5, 17$ でも、 $f(n) = n^2 + n + p$ の値が  $0 \leq n \leq p - 2$  で全て素数となるのか検証してみましょう。

**レオンハルト・オイラーってどんな人?!**



1707~1783

「オイラーの定理」「オイラー予想」「オイラーの運動方程式」「オイラーの多面体定理」「オイラー図」など数学や物理学においてオイラーの業績を示す言葉が残されている。オイラーは人類史上最も多くの論文を書いた数学者といわれ、1911年から刊行された論文の全集は、100年以上たった今日でも完結していない。